

大学50年誌の発刊にあたって

— 半世紀の歩みに思うこと —

本学園も創立50周年を迎えました。一つの峠が見えるところまでは歩みつづけてきました。しかしこれも、非力な私どもの手で出来ることではありません。ひとえに、半世紀にわたって本学園に深いご理解とご支援を惜しまれなかった各界・各層の皆様のお力添えによるものと、深く感謝いたしております。

私ども学園関係者は「天命を知る」歳を迎え、本学園に課せられた社会的使命の重さを改めて噛みしめております。『日本福祉大学50年誌』は、この思いを自ら確かめ、次の飛躍の糧を得るために、その足跡の概要を整理したものです。

昭和初期、福岡県「生の松原」にあった癩（ハンセン病）療養所での患者さんのお世話から社会事業の道を歩み始めた創立者・鈴木修学先生の壮絶な実践活動の一環として、本学は生まれました。困窮する人びとの救済に身を投じる社会事業専門従事者の少なさに心を痛めた先生は、その養成機関の設立を決意し、檀信徒の浄財によって、1953（昭和28）年4月、本学の前身である「中部社会事業短期大学」を開設しました。その「建学の精神」の中で、「積尊のお言葉、『我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す』この一偈を精神的根源としたい」と述べています。これは、社会福祉の原点を示すものです。これを基に、学園関係者の手で『教育標語』が定められ、「万人の福祉のために、真実と慈愛と献身を」目指す教育実践が始まりました。本学の福祉研究と教育の原点を示すものです。このような建学理想は、50年の歳月を経て、いまなおみずみずしく生きています。その鋭い先見性に導かれながら、教職員と学生は一体となって本学の発展に心血を注いできました。

収容定員160人のこの小さな大学の大きな理想は、伊勢湾台風での寝食を忘れた救援活動や阪神大震災への素早い救援ネットワーク活動など、教職員と学生が罹災者と共に手を携えて困難を打開する福祉実践活動の歴史的伝統を築きあげてきました。この伝統は、全収容定員1万人以上に育ってきた学園全体に今も生き続けています。



また、中部社会事業短期大学は、1957（昭和32）年、わが国初の福祉専門の大学に発展しました。創立者・鈴木修学先生の人間と時代を見抜く慧眼によって命名された『日本福祉大学』の名称もまた、45年を経て一層新鮮で、その輝きを増しています。私ども学園関係者は、このような建学理想と大学名称の先進性に、高い誇りと確固とした自信を持つと共に、その発展に全力を傾注し、その名を辱めない義務と責任があることを痛感しています。

不安・激動の幕開けとなった21世紀ですが、この困難を克服して、必ずや「優しさに満ちた人間の世紀」となることを願っています。21世紀の高度情報福祉社会において本学が果たすべき役割は、この50年間一貫して探求してきた「福祉の研究と教育」を土台にして、新しい時代の人間の幸福追求に立ち向かうことです。先端科学技術と人間と自然との調和ある発展が強く求められているのが21世紀です。この大きく複雑な課題に応えるために、本学は、人間の尊厳を守り、すべての人々の幸福と安全と快適性の実現に多面的に貢献できる高度専門家を養成することに集中します。そのためにこそ、大学を中核とした「人間福祉複合系（ハートウェア・コンプレックス）の総合学園」の建設を目指した創立50周年記念事業に取り組みました。そして、21世紀の早い時期に、国内でも、国際的にも、日本福祉大学が「人間福祉複合系の研究と教育」のキー・ステーションとなることを確信しています。本学が、今年度の文部科学省『21世紀COEプログラム』の福祉学研究領域で唯一採択されたのもその一里塚を示すものです。

本学園半世紀の歩みを通して、多くの皆様方から頂いたご厚情・ご鞭撻に、重ねて厚くお礼申し上げますと共に、これからの半世紀に挑む本学園の新たな歩みにも、一層深いご理解と力強いご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2003年10月

創立50周年記念事業本部長

日本福祉大学理事長 大 沢 勝